

# 幕末日本と英国・スコットランド交流史

## —L. オリファント研究

The Relationship between British (Scottish) Diplomat and Japan  
in late 19<sup>th</sup> Century, on the Historical role of Lawrence Oliphant

北 政 巳  
Masami KITA

### 1. 問題の所在

幕末維新期の研究には、多くの日本人歴史家の先駆的業績がありながら、まず不思議に思うのは、アメリカのペリー研究の数に比べて、当時アジアでも圧倒的勢力を誇りインド・中国を植民地化し日本に迫ってきた英国勢力の歴史的研究が少ないことである。

その理由のひとつは英国勢力と云ってもスコットランド人 (Scottish) 勢力であり自らをブリティッシュ (British) となのり、イングランド人 (English) とは異なる歴史経過をたどってきた国と人々であった<sup>(1)</sup>。

また幕末の日英通商条約がアメリカ、オランダ、ロシアに次いで安政5条約の中でも4番目であったことも日本人から観れば一部の識者を除いてイギリス勢力がどれほどアジア・極東に関心を持ち日本進出に興味を示していたかも理解されなかったかもしれない。

しかしイギリスを代表して協定に調印したジェームズ・ブルース (第8代エルギン伯爵) は、アメリカのハリスが臨時の外交官職であったのに対し、エルギン伯爵は既に大英帝国を代表しジャマイカ総督、カナダ総督を経歴していた。そして第2次アヘン戦争と呼ばれるアロー号事件が勃発した時に特命全権大使として中国へ派遣され、日本接近を計るアメリカの動きを見て日本にも立ち寄り協定を結ぶように示唆されていたが、わずかな期間での滞日で直ぐに中国へ戻ったので、我が国の資料にはほとんど残らなかった<sup>(2)</sup>。

エルギン伯爵はスコットランド名家貴族であったが、彼の秘書のローレンス・オリファントも、スコットランド出身の優れた文筆家であった。エルギン伯爵に同行してカナダに赴き対アメリカ通商交渉に立ち合った。エルギン伯爵はカナダを英国領にとどめ『自立』をまもるために最初の英連邦国家としての自治国カナダを考案し、また国内的にもフランス語圏と英語圏の対立を解消したことから「カナダ建国の父」と讃えられる<sup>(3)</sup>。

第8代エルギン伯爵の見事な外交に感動し、彼にアロー号事件解決の特使命令が出た時に、オリファントは喜んで随行に同意、また見事な随行記録を残した。事実、日本で最も有名な外交官のひとりアーネスト・サトウもロンドン大学時代にエルギン伯爵の訪日誌を読んだことが日本への関心の目覚めと書き残している<sup>(4)</sup>。

第8代エルギン伯爵については既に研究成果を公表してきたので、本稿では、より日本人には関心のあるオリファントを取り上げる。彼が日本で有名なのは、帰国後に日本への勤務を外務省に申し出て、日本在のパークスの後任と考えて派遣されたが、再来日後わずかにして東禅寺事件で、侍の襲撃を受けて怪我をして帰国する憂き目にあった<sup>6)</sup>。

にもかかわらずオリファントは母国スコットランドの地で、「極東の素晴らしい島国・日本」を講演して多くの青年に夢を鼓吹し、多くの文筆活動を行った。

さらに彼自身の人生の後半には、自らの敬神するアメリカ人ハリスの「新生活運動」に薩摩藩藩士を連れて渡米するなどドラマティックな人生を展開した。そこで本稿ではオリファントの人生と幕末期の日本人青年との関連を意識しながらまとめてみたい。

## 2. オリファントの生い立ちと環境

歴史に残る偉大な人物には、常に背後に偉大な伴侶や支持者がいる。少なくとも第8代エルギン伯爵にとって、カナダ総督の赴任時の対アメリカ交渉の秘書として随行し、また次の中国・日本出張にも同行したローレンス・オリファント (Lawrence Oliphant) は、単なる秘書としての役割を越え2人の歴史的業績として評価すべき点も多い。彼はカナダやアメリカでのエルギン伯爵の対外交渉の場に同行・記録した。のちに初代大統領となるリンカーンとも交渉した。

さらに中国での「アロー号事件」処理の特使秘書として随行し、第8代エルギン伯爵の活動記録『エルギン卿遣中日使節録』を残した<sup>6)</sup>。

ローレンス・オリファントは1829年に南アフリカのケープ植民地の喜望峰地域に、スコットランド出身弁護士で州法務長官アンソニーの長男に生まれた。彼の母マリアの父キャンベル大尉はケープ植民地在のスコットランド第72連隊指揮官であった。彼の両親は、敬虔・禁欲主義のスコットランド監督教会派 (エバンゲリカル) であった<sup>7)</sup>。

当時のアフリカとスコットランドの関係は C.W. トムソン著『スコットランド人の行動と業績』(1906年) のアフリカの章を執筆した J. チェンバレンが「スコットランド人は英帝国形成において、その貢献の割合は他地域 (イングランド・ウェールズ等) をはるかに超える」と記録し、さらにスコットランド人が移住地各地で「知力と忍耐力を発揮し、責任ある立場につき嫉妬心を蒙りながら、植民地で信頼・信用を勝ち得てきたが、その源泉は民族的道徳の高潔性に起因する」と評価した<sup>8)</sup>。

17世紀にスコットランド人冒険家 W. リスゴウがヨーロッパからエジプトを通りアフリカに入りスペイン軍捕虜となった記録がある。スコットランド人のアフリカ探検の公式記録としては、1763年にスコットランドのスターリング生まれでエルギン一族遠縁の J. ブルースがアルジェリアの英国領事になり、アレキサンドリアからカイロ、青ナイルを探検したことに始まる。

本格的なイギリス資本主義の進出により、1860年以降にアフリカ探検が始まる。イングランド人スベイクとスコットランド人 J.A. グランドの2人は『アフリカを踏破して』(1864年) を共同出版した<sup>9)</sup>。

ただしアフリカ南端に位置する南アフリカ植民地は、喜望峰を回り海路でインドへ向かう経路であり、大航海時代以来オランダとイギリスをはじめ数多くのヨーロッパ東インド会社の船舶が立ち寄った。特に1799年に海軍エルフィンストン大将与陸軍クレイグ大將はオランダがフランス軍に降伏した時に、一時的にケープタウンを単独統治したが、1802年にはオランダに返還した。しかしナポレオン戦争勃発による政情変化により、スコットランド軍のD.ベアード伯爵率いる5600人の軍隊がケープ植民地を奪取し、イギリス南アフリカ植民地とした。

それ以前の先駆者として、1777年にオランダの東インド会社勤務のR.J.ゴウドン大尉がバール河と連結するオレンジ河を発見し河口調査を行い、1812年のスコットランド人宣教師A.M.キャンベルがオレンジ河流域を踏査し地図化したことが挙げられる。

イギリス政府も1819年に東ケープタウンに5000人をバブーンズ河流域の豊かな土地地域に植民したが、それが現在のケープベッド・フォード地域にあたる。

その中にロックスバラ出身のT.プリングルがいた。彼は現地に学校を作り、雑誌『南アフリカ』、最初の日刊紙『南アフリカ商業情宣報』を発刊した。プリングルは敬虔なプロテスタントで1827年にはスコットランドに戻り、奴隷廃止協会事務局長となり、封建制度遺制の改革・廃止に活躍した。また彼の情宣活動に刺激された数多くのスコットランド宣教師もエディンバラ地域からアフリカへと赴いた。その中で最も有名な人物は1826-70年ケープ郊外のベクアナランドで伝道し、グラスゴウの著名な牧師R.モファットの娘と結婚したグラスゴウ大学卒の探検家D.リビングストンであった<sup>(10)</sup>。

つまり南アフリカ植民地にはスコットランド出身のエリート・グループ地域が形成された。興味深いのは幕末日本に到着して1854年の日英和親条約を結んだイギリス東インド会社海軍提督のJ.スターリングもスコットランド系南アフリカ人であった。つまり英帝国の「先進飛び地」のような社会が南アフリカに形成された。

ローレンス・オリファントは10歳の時、教育熱心な母に連れられて南アフリカからスコットランドのバース州のコンディに移住した。父は貴族称号を得て1839年にはスリランカのセイロン判事に任命され、同総督に次ぐ高い官職に就いた。

またアニィ・テイラー著『ローレンス・オリファント 1829-1888年』によると、彼の一族は「彼の祖先がスコットランド王ロバート・ブルースの娘と結婚した」伝承を信じる誇り高い一族であった。

ローレンスは12歳になり、初めての「グランド・ツアー」として父の任地スリランカへの旅の途中にフランス、イタリア、ギリシア、トルコを旅した。南アフリカにはオランダ人植民者も多く、彼自身が多少のオランダ語も身につけており、後年に第8代エルギン伯爵に随行して鎖国時代の日本に来た時にオランダ語を使うことができた<sup>(11)</sup>。

オリファントはケンブリッジ大学でアジア・東洋学を学び、父の勤務するスリランカの裁判所に就職した。彼は休暇中にはインドからネパールまでを旅行し、中央アジア・東欧事情にも精通し、その知識を評価され外務省から囑託依頼を受けたが、第8代エルギン伯爵との不思議な縁につながり、彼のカナダ赴任に同行することを選んだ<sup>(12)</sup>。

また1854年12月18日にカナダから帰英する時、エルギン伯爵を後継したカナダ総督からも秘書依頼を受けたが、オリファントはそれを断り帰国した。父親もスリランカ司法長官から引退し英国に戻っていた。オリファントは1855年1月からエルギン伯爵邸に出入りしていた。オリファントは国際活動が高く評価され、1824年創立の紳士クラブのアテネオン・クラブ・メンバーにも選出された。

テイラーによると、オリファントには未訪問の東洋・アジアを見たいとの願望があり、アロー号事件解決の特使に第8代エルギン伯爵が委任された時、エルギン伯爵からの依頼を快諾してアジアへ随行した。インド・中国・日本から帰国後、エルギン伯爵邸に滞在し随行記録の遣中・日使録を書き上げ出版した<sup>(13)</sup>。

### 3. ジャーナリストとしての活躍

1853年にヨーロッパ大陸で不可避的と思われた対ロシア戦争が勃発する。ロシアは「黒海のロシア海岸」を夢見て南下した。イギリスはトルコと同盟を結び対抗し、露土戦争に勝利しロシア南下策の夢を砕いた。歴史的には露土戦争では、英軍従軍看護婦のナイチンゲールが登場して有名になった。

戦後ヨーロッパに平和が到来すると、イギリスに始まった鉄道建設がヨーロッパ各地に敷設され、都市間が連結される時代となり、多くの旅行者が鉄道で可能となった「新世界」を旅し、彼らの旅行記を載せる雑誌が流行した。多くの作家や画家、音楽家も、豊かなヨーロッパ社会の社交界に登場し、一般庶民にも各地の銅版画による印刷絵も好まれた<sup>(14)</sup>。

エディンバラのジョン・ブラックウッドは彼の家名を冠した『ブラックウッド・マガジン』誌を発起したが、人々からは通称マガ(Maga)と呼ばれた。彼は2歳年下のオリファントをはじめ世界各地で様々な体験をしながら育った「国際的スコットランド人」との友好を保ち、彼らの体験や冒険を通じ多くの同郷青年達に夢を与えるように、出版活動に専念した。しかしブラックウッド自身は、オリファントの表現するロシアのニコライ皇帝やフランスのナポレオン3世への個人的な心酔には批判的であった<sup>(15)</sup>。

オリファントも多くの知人・友人の作家を出版社ウィリアム・ブラックウッド父子社に紹介した。『クリミア自治共和国』8巻(1863-1867年)を同出版社から発刊したイングランド人作家のアレクサンダー・ウィリアム・キングレイクも彼の友人の一人でイートン校からケンブリッジ大学同窓生だった<sup>(16)</sup>。

グーテンベルクの活版印刷がヨーロッパの情宣活動の有様を変えたが、その技術はドイツからスコットランドに伝来した。活版印刷が最も使われたのは宗教改革の時代であり、ある意味で活版印刷はスコットランド・プロテスタントの広報活動の最大武器となった。

古くはスコットランド宗教改革者のノックスも、カトリックのメアリー女王を攻撃した時にも、数多くのビラ印刷を配布して世論を味方につけた経緯があった。また後年、明治時代の日本へ到来した最初の西欧印刷技術も機械設備も、製紙業も共に、エディンバラからであった<sup>(17)</sup>。

オリファントは1853年にブラックウッド社から『黒海のロシア海岸』を出版し、知識人間のベストセラーとなり、短期間に4版を数え400ポンドを得た。また彼は1854年2月に『セイロンでの楽しい生活』を執筆・出版し、優れた文才を発揮した。

オリファントは当時のイギリスの2大新聞で『タイムズ』のライバルの『デイリー・ニュース』に多くの記事を寄稿した。ロンドンで母と共に生活をしながら、各地へ取材旅行に出かけたが、慈善活動行事にも積極的に関与し、特に学校に招かれると熱心に「神への福音と新世界への貢献」を説いた<sup>(18)</sup>。

クリミア戦争が勃発すると、オリファントは自著『クリミアへの侵略』の中に、誰よりも早くイスタンブールへ到着、1835年にマッキントッシュ大尉が起草したイスタンブール港の防衛案が未実行の状況を見て、オリファントが同市の守備隊長のリーガン伯爵に、自ら集めた情報と戦略案を提供し助言した。

1854年5月には「中央アジアにおけるロシアの政策と進出」を『ブラックウッド・マガジン』に掲載した。多くの識者から彼の知識と行動力への高い評価を受けたが、『タイムズ』の編集長J. ディランはオリファントに同紙特派員としてコンスタンチノーブルへの出張を勧めた。しかし、この仕事は結局、彼のライバルのジャーナリストであったアイルランド人従軍記者 W.H. ラッセルが扱うことになった<sup>(19)</sup>。

オリファントは外務大臣クラレンドンの命によりロシア南部のチェルケスへの使節団に参加した。コーカサス山中でイスラム教の指導者シャミールに会い、彼がロシアを憎みイギリス軍の味方になることを確信して外務大臣クラレンドンに報告した。クラレンドンはトルコ大使ストラッドフォード伯爵に命じチェルケス地区を自由化し近隣地域も味方につけ、ロシア軍への対抗に向かわせた。そしてロイドに命じてシャミールに助勢する援軍派遣を決めた。

その時に何故オリファントが選ばれなかったのかの疑問が残るが、オリファントは中央アジアへのポストを断り、同時期に第8代エルギン伯爵に随行して秘書としてワシントンに赴き、特別の外交上の業務に当たる仕事を選んだ。この選択を伝記作家テイラーはオリファント家族とエルギン伯爵のブルース一族との深い関係に求める。オリファントの母が第8代エルギンの姉のシャーロット・ロッカー伯爵夫人やオーガスタ・ブルース伯爵夫人と親しかった<sup>(20)</sup>。

第8代エルギン・第12代キンカーディン合同伯爵はジャマイカ、カナダでの優れた統治能力を発揮し、当時の英国社会でのヒーローとなった。彼は1847年、カナダ社会が政治混乱から分裂の危機の時代に、カナダ総督で赴任した。特に少数派のフランス語植民者がイギリスからの移民者を敵視し市民戦争を起こそうとした時に、エルギン伯爵はカナダの自治へ向けて対立双方の意見と利害を聞き、イギリス帝国の利益と植民地双方の互惠関係確立の方途の路線を定め、多くの識者の賛同を得た。その意味でエルギン伯爵の貢献により英国の連邦主義化とカナダ自治領の設立が実現し、その後のオーストラリア、南アフリカさらにニュージーランド自治領の道を開いた<sup>(21)</sup>。

1854年5月にエルギン伯爵はロンドンに帰国した。カナダとアメリカ間の互惠条約締結の前提としてのイギリス政府の立場の打合わせであった。つまり1845年のイギリスの穀物法撤廃の結果、

カナダ産の廉価な穀物がイギリスに輸出できなくなり農民の不平・不満が高まった。その結果としてカナダ経済は疲弊化し、エルギン伯爵の給与も一時、約束手形で払われた程の苦境にあった。

多くのカナダ人が圧倒的な隣国アメリカの経済力の浸透を前にして併合されるのも仕方がないと思った。このような難局にあってイギリス政府の意向を受けたエルギン伯爵は私設秘書オリファントを連れて、カナダとアメリカ間の自由貿易関係の樹立を目指し交渉に臨んだ<sup>(22)</sup>。

ちょうどアメリカ議会では、黒人奴隷の解放問題から南北地域の対立が激化していた。エルギン伯爵はワシントン訪問直後には、スコットランド啓蒙主義思想と豊富な知識と体験に基づき民主党側を擁護した。アメリカにもエルギン伯爵につながるスコットランド人脈の友人が多数おり、中でも彼が「生涯の友人」と呼んだ南部プランテーション所有者で、トルコ駐在アメリカ公使をもつとめたプリングルがいた<sup>(23)</sup>。

オリファントは第8代エルギン伯爵の優れた対アメリカ通商外交の手腕を見る歴史的証人となった。エルギン伯爵はカナダの自治を英国のヴィクトリア女王に進言し裁可を得た。そして英連邦最初の自治国カナダが誕生した。エルギン伯爵の外交術に感動したオリファントは、次にイギリス政府が第8代エルギン伯爵にアロー号事件解決への特使として中国赴任の命を下した時、オリファント自身への仕事話も多くあったが、それを断り自らの希望として中国・日本へのエルギン伯爵随行を決めた<sup>(24)</sup>。

#### 4. オリファントと日本人留学生

オリファントは、1859年にエルギン伯爵の中国・日本随行からイギリスに帰国した直後、外務大臣J. ラッセルに日本勤務希望を申し出た。ラッセルはオリファントのエルギン伯爵の日本随行での功績を認め、異例の抜擢を行い31歳で日本大使館スタッフに任命した。ちょうどオールコックが2年間の離職を申し出ており、その時にはオリファントを代行として任命した。またオリファント自身も、日本勤務の要望書を出す際にオールコックから推薦を受けたと書き記した<sup>(25)</sup>。

そしてオリファントの願いが叶い1861年にイギリス日本大使館1等書記官として赴任したが、残念なことに僅か着任の数週間後に生じた「東善寺事件」で日本人暴徒の襲撃を受け負傷、帰国せざるを得なかった。

帰国し怪我の治療後、再びヨーロッパ各地を旅行し、ポーランド暴動やシュレスヴィッシュ・ホルスタイン紛争を見聞した後、国会議員への決意を固め1864年7月に地元スコットランドのスターリングから出馬し下院議員に選出された。

オリファントは襲撃されて負傷したにもかかわらず、極東の小島の日本が大好きで見聞した日本の文化や伝統美を多くの新聞・雑誌に紹介した。また各地での講演会でスコットランド人青年に「極東の高度な独自文化な島国日本」を語りかけた<sup>(26)</sup>。

事実、日本へ最初に到来したイギリス人の中でもスコットランド北東部（アバディーン、セント・アントリューズ、ダンディ）出身者が多かった。それはスコットランド自体の産業革命の中枢企業がアバディーンから南下してダンディ、さらに西部スコットランド・グラスゴウに移って



いく過程と符合する。スコットランド東海岸出身者が伝統的に移民・移住する者が多かったが、日本へも同地域からのスコットランド人が多かった<sup>(27)</sup>。

日本で有名なトーマス・B・グラバーの出身地はアバディーンである。アバディーンは中世には北海を挟んで北東ヨーロッパとの不定期な交易は存在したが、18世紀後半に人口が増加しても就業機会もなく、青年は職を求めて北海を渡りヨーロッパ大陸か、南下しグラスゴウやエディンバラに移動した。それは、ちょうどスコットランド産業革命の基幹部がグラスゴウに集中する時期でもあった。アバディーンの木造船業者が移民してカナダやアメリカ東部の造船会社を発起したが、また南下してグラスゴウ近郊のクライド河流域に定住し、その後に鉄製蒸気船製造業者となった<sup>(28)</sup>。

面白いのはスコットランドの略称スコッチ (Scotch) は節儉の意味であり、イングランド人は「けち野郎」と侮蔑的に呼ぶ。ところがスコットランドの中で最も「ドケチ」なのはアバディーン人とされ、アバドニアン (Aberdonian) と呼ばれる<sup>(29)</sup>。

イギリスでは1852年にアバディーン公の G.H. ゴウドンが首相となった。彼は187年にアバディーンに生まれ、1801年にアバディーン公爵となり、1828-30年、1841-46年の2度イギリスの外務大臣となった。彼が合併後のイギリスの世界各地の植民地の行政官に友人・知人のスコットランド貴族を紹介した。また第8代エルギン伯爵のイートン校、オクスフォード大学の同窓生で最も仲のよかった W.E. グラッドストーンはエディンバラ出身でリバプールから国會議員となり4度の首相を務め、アイルランド自治問題にも尽力し、イギリスの自由貿易主義を象徴する政治家であった<sup>(30)</sup>。

ローレンス・オリファントは南アフリカで生まれたが彼の父はもともとスターリング出身であった。東禅寺事件で負傷帰国しても、オリファントは自らの憧憬の国日本と日本人への関心を持ち続けた。事実、オリファントはトルコ戦争従軍、第8代エルギン伯爵に随行でのカナダ・アメリカ出張、さらにインド・中国・日本への随行でイギリス社交界では著名人となった。また自由党の若手議員として活躍した<sup>(31)</sup>。

薩摩藩から英国へ密航しロンドンにいた薩摩藩士の鯨島と吉田にスコットランド旅行を薦めたのは下院議員オリファントである。彼の気持ちは「現今のヨーロッパ文明社会の腐敗と墮落、列強諸国による食欲な搾取と篡奪の歴史」を日本人青年に語り、「小さく魅力的な神秘に国からやってきた若者たちに、近代文明の非を悟らせ、アジア古来の『信義』と『廉恥』の精神がいかに大切かを分かせたかった」であった<sup>(32)</sup>。

オリファントは、文明批判を展開する中で、次第にアメリカの新興宗教家 T.B. ハリスの思想・宗教観の「新生社」に傾注した。ハリスはスウェーデン・ボルグ派の流れを継承した神秘主義と急激な社会改良を訴え、文明批判からの社会改革を提唱した。ハリスは新天地アメリカに植民地 (colony) を作り、それが新文明の創出と世界の再生に貢献すると信じ、「新世兄弟」(Brotherhood of the New Life) 社を設立した<sup>(33)</sup>。

1867年4月、オリファントがアメリカからロンドン万国博覧会と自著出版交渉にロンドンへ来

た時、彼は「精神の師匠」ハリスに8人の薩摩藩留学生と会見させた。鯨島と吉田とは再会であった。

ハリスは5歳の時に両親に連れられ、英国のフェニイ・ストラッドフォードからニューヨーク州ユティカへ移民した。鯨島や吉田は既にアメリカでハリス思想の実践に心酔していたが、他の4名も傾注した。

ハリスの家父長的な自然生活重視の人間関係観が、西欧社会に挫折感を持つ彼らの心をつかんだ。同年5月に薩摩藩士監督の町田民部が帰国するためマルセイユに向かうと、彼等は直ぐにスコットランドにいるハリスの許を訪問した<sup>(34)</sup>。

アバディーングラバー実家に引きとられていた磯永等の5名は、ハリスに「建言書」を提出し新生社共同体参加を申し出た。そして彼等は長年面倒を見てくれたロンドン大学ユニバーシティ・カレッジのウィリアムソン教授やグレイン教授の反対を押し切り、ハリスについてアメリカへ行く決意をする。彼等は2週間後、リバプールから船に乗りアメリカに渡った<sup>(35)</sup>。

脱薩摩藩士で慶応2年に藩医結城幸安と共にロンドンに到着した中井弘蔵（弘）が、1867年春に、薩摩藩士吉田、森、鯨島等に連れられハリスと会い説教を聞き、従前の人生を悔い改め、人生再生の機会を与えてくれたと大感動した<sup>(36)</sup>。

帰国後、中井は外務省、工部省を経て、滋賀県知事となり琵琶湖疎水の着工に尽力、さらに京都府知事にもなった。興味深いのは、この中井のイギリス留学は、幕府が慶応2年4月7日（1866年5月21日）に日本人海外渡航の禁止を撤廃した後での出国で、密航ではなかった点である。

## 5. 結び その後のオリファントの人生

オリファントは19世紀イギリス・スコットランドを象徴する大英帝国の植民地の南アフリカに厳格な伝統主義のスコットランド人家庭に生まれ、エリート教育を受けて成長し文才を生かし動乱のヨーロッパで活躍、さらにエルギン伯爵に随行してアメリカ・カナダ、続いてインド・中国・日本を旅した。彼は東禅寺事件で負傷し帰国したが、一族の故郷のスターリングから国会議員となった。またロンドン在の日本人青年に影響を与えてアメリカに連れて行ったが、その後もドラマティックな人生を辿る<sup>(37)</sup>。

ローレンス・オリファントは日本から帰国後、一族の故郷スコットランドのスターリングを中心に作家活動を展開した。下院議員となりロンドンに下ると、スコットランド人ネットワークのJ&MのH. マセソン氏やユニバーシティ・カレッジのA. ウィリアムソン教授たちとの親交を深めた。また日英条約後に来日した多くのスコットランド人青年は、彼の著書や雑誌・新聞を読んで日本への夢を抱いた。

特に長崎で活躍したグラバーはアバディーン出身で彼のスターリングにも近かった。それ故にロンドンやアバディーンでの日本人青年にも、彼との知遇は有益であった。オリファントはアジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカと世界を旅して、日本では東禅寺事件で負傷しながらも「極東の小島」への熱い気持ちは変わらず、多くの青年に日本への想いを語り、執筆活動を続けた<sup>(38)</sup>。



彼の崇拝する宗教家トーマス・L・ハリスのロンドン訪問時に薩摩藩士を紹介した。その後、オリファントは下院議員職までも辞し共鳴者の日本人青年を連れアメリカに渡り、ハリスの作ったエリー湖畔の理想郷プロクトンに参加・定住した。オリファントは、ハリスの導く精神的な自然生活の中で肉体労働に従事したが、時折ハリスの依頼により現実社会に戻り、「新生活運動」経済支援の活動を依頼された。理性的で物欲を離れた彼の文筆はヨーロッパの知識人に好まれ、彼自身も文明社会と自然社会を往復してリフレッシュな気持ちで執筆活動を続けた<sup>(39)</sup>。

オリファントにはハリスから資金獲得のため3年間の俗世間への戻りを命じられヨーロッパに戻り、イギリスの『タイムズ』の記者として普仏戦争に参加した他、7年間フランスのパリでジャーナリストとして活躍した。そこで彼の母を通じて古風な女性アリスと知り合い1872年6月にロンドンで結婚した<sup>(40)</sup>。

1873年にオリファントは妻と母を連れてアメリカのプロクトンに戻り「新生活運動」に再び従事した。しかしハリスからのオリファントへの経済的要求はさらに頻繁となり、共同体の財政問題のためにニューヨークまたイングランドでの仕事が増加した。しかしオリファントは1878年12月頃まではハリスを神のような師と信じていた<sup>(41)</sup>。

次第にハリスに嫌気を持ち始めた一方、オリファントはパレスチナの大規模な殖民運動に関心を持ち始めた。1879年にパレスチナからトルコ・コンスタンティンノーブルを旅行し、1882年に本格化するシオニズム (Zionism) によるユダヤ人入植運動直前であったが、多くの希望と信仰心にあふれるユダヤ人が聖地の北半分側への定住を試みた<sup>(42)</sup>。

オリファントから観れば、既にイギリスやアメリカ在のユダヤ人が「予言」の実現と「世紀末」を信じて財政支援を申し出ており、難しい仕事ではなかった。イギリス在の「至福千年信仰主義者」(Christadelphians) やユダヤ人、キリスト教信者からの募金により、ガリラヤ (イスラエル北部のキリスト初期伝導の地) を購入しユダヤ人難民を収容していた。

またオリファントは1882年にルーマニア出身のユダヤ人作家ナフタリ・ヘルツイムバーを秘書として連れてエルサレムを訪問したが、ヘルツイムバーは後年『私たちの希望』の作品で有名な作家となった<sup>(43)</sup>。

オリファントは再度イギリスを訪問、さらにアメリカ・カリフォルニアに戻った。イギリスからアメリカに連れてきた日本人青年のうち2人は抜けてニューヨークのラトガース大に移ったが、磯永はサンタ・ローザの移植地でのワイン農園経営で成功していた。

次にオリファントはアメリカにいた妻を連れてエジプトに赴いた。そして1881年ローレンスがハリスと意見対立して別れた時、彼の妻も一緒にイスラエルのハリファに移住した。オリファントは神秘主義への傾斜を深め、翌年には『マソラム』、ついで1883年に『石の道路』等を出版した。1884年に夫妻共同で神秘主義の本『進化する人類の積極的勢力』をエディンバラの書店から出版した。

1885年12月、イスラエルの古都保養地のティベリア湖畔で妻が発熱し、翌年1月に逝去した。彼女の死後、精神的なつながりを認識したかたちで再び執筆に専念し、1887年11月にイングリ

ドに戻り『科学的宗教』を出版した<sup>(44)</sup>。

1888年の5月の聖霊降臨祭の頃、オリファントは再婚を決意するが、それはスコットランドのラナーク州で革新的な綿工場経営を開始し社会主義経営者として有名であったバート・オーウェンの孫娘のロザモンドだった。彼等はイギリスのモルバーンで結婚、イスラエルのハリファで生活した。

1888年12月にイギリス新婚旅行中にオリファントは病気となり死亡した。なおスコットランドの東海岸地域は伝統的に北海を挟んでヨーロッパ大陸と連携する文化を持つプロテスタント文化が強いが、スコットランド西海岸と西部諸島は一番古いユダヤ人達が追われて移ったヘブリアデス諸島を中心にユダヤ系住民やカトリック信者が多い特徴がある。

当時の有識者の間にはスコットランド啓蒙主義がヨーロッパの知性の時代を開き、科学技術の時代の最盛期を迎えていた。エディンバラ大学に学び『種の起源』を出版したダーウィンの『進化論』がもてはやされ、一方で生存競争の結果を「自然淘汰」と把握する思想・宗教観と、全く対立する「自然主義」の思想・宗教観が対立した<sup>(45)</sup>。

ダーウィンの影響下にイギリス人ハーバード・スペンサーは『社会進化論』を出版し、人間社会における進化・進展を哲学的に考察した。しかしオリファントの場合、あまりにも多くの要素から影響を受けて、神秘主義に傾注していった。ジャーナリストとして多くの執筆を続けた。オリファントが逝去した時、イギリスのタイムズ紙は「これほどのロマンティックな幅広い経歴の主がいるだろうか、否いないだろう。不思議な相対立する人格を明確に持っていた人物であった」と評した<sup>(46)</sup>。

また近代日本史からしても不思議な人物であったが、彼の人生を究明していくと、どの段階にもスコットランドとの縁を示す人脈と経歴が出てくるのも不思議である<sup>(47)</sup>。

#### 注

- (1) 拙著『近代スコットランド社会経済史研究』（同文館 昭和60年）、同『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』（藤原書店 2003年）参照
- (2) 拙稿「第8代エルギン伯爵と大英帝国の世界」（『創価経済論集』第39巻1-4合併号 2010年3月）1-16頁
- (3) D.C. Scott, *The Makers of Canada: Lord Elgin*, 1905, Kissinger Publisher, 2110
- (4) 庄田元男訳『ネスト・サトウ伝』（B.M. アレン著 平凡社 東洋文庫648, 1999年, 18頁
- (5) 文久2年5月29日(1862年6月26日)の東禅寺事件。英国公使館への襲撃で長崎領事のモリソンと1等書記官のオリファントは負傷した。宮永 孝『日本とイギリス, 日英交流の400年』（山川出版社 2000年）212-219頁。
- (6) L. Oliphant, *Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan in the years of 1857*, 58, 59, II vols, William Blackwood and Sons, 1869. 日本に関する部分が岡田章雄訳『エルギン卿遣日使使録』（雄松堂書店 昭和53年）で翻訳出版された。
- (7) P. Henderson, *The Life of Laurence Oliphant*, Traveler, Diplomat and Mystic, London, 1956 の他, P. Quenelle, 'Victorian who found a guru' in *Times* 17<sup>th</sup> July, 1952 がある。
- (8) C.W. Thomson, *Scotland' Work and Worth*, An Epitome of Scotland's Story from Early Times to the Twentieth Century, with a Story of the Contributions of Scotsmen in Peace and in War to the Growth of the British Empire and Progress of the World, Vol, 1 & 2, Oliphant, Anderson & Ferrier, Edinburgh 1909 に詳しい。

- (9) 拙著『近代スコットランド移民史研究』（御茶の水書房 1998年）の「スコットランド人のアフリカ移民」115-160, 262-285頁。
- (10) V. Harlow & E.M. Silvereds, *History of East Africa*, Vol. 2. 1965 R. Hyam, 'Partition of Africa: a review article' in *Historical Journal*, Vol. 7. 1964, pp.134-169.
- (11) オリファントは南アフリカに生まれケンブリッジ大学に学んでおり、オランダ・フランス語の他、数か国語に精通していた。日本記録にも細かく述べている。
- (12) オリファントの母が第8代エルギン伯爵の母と知己であった。オリファントの父はスコットランドのスターリング出身、母親もスコットランド高地の軍人であり、宗教も監督教会派でエルギン伯爵一族と合致していた。
- (13) A. Taylor., *Laurence Oliphant* 1829-1888, Traveler · Writer · With · Secretagent · Diplomat · Mystic Entrepreneur, Oxford University Press, 1982. p.34
- (14) 拙著前掲『近代スコットランド移民史研究』の「スコットランド人のロシア移民」（283-306頁）参照
- (15) エディンバラは「北欧のアテネ」といわれスコットランド・ルネッサンスの「文芸の都」として評価された。ヨーロッパ知の啓蒙活動はエディンバラの出版文化が大きな役割を果たした。ブラックウッド社は新旧聖書を1冊にまとめて発刊した。他方グラスゴウは「鉄道の都」、「機械の都」、「造船の都」として賞賛された。A. Herman, *How the Scots Invented the Modern World, The True Story of How Western Europe's Poorest Nation Created Our World & Everything in It*, Crown Publishers, New York, 2001. pp.21, 142
- (16) A.W. Kinglake., *The Invasion of the Crimea*, William Blackwood & Sons, 1865, pp.23-25.
- (17) 明治政府はグラバーを介して紙幣寮を設立した。民間では王子製紙が明治6年に横浜居留地の英国のウォルシュ・ホール商社を通じて機械と技師を注文した。由井常彦他『紙の文化と産業 製紙業の100年』（日本経営史研究所 昭和48年）82-86頁
- (18) オリファントには数多くの宗教書がある。回想録的に書かれたL. Oliphant., *Piccadilly: A Fragment of Contemporary Biography*, William Blackwood & Sons, Edinburgh, MDCCCXCI, rep in Bibliolife, 2008 参照。
- (19) B. Russell ed., *The Amberley Papers*, Hogarth, 1937, p.56; L.L. Bradley ed., *Letters of J. Ruskin to Lord and Lady Mount Temple*, Ohio University Press 1964. p.45
- (20) Lady A. Stanley, *Letters of Augusta Stanley*, 1849-1867. 1927. p.32
- (21) C. Martin., *Empire and Commonwealth: Studies in Governance and Self-Government in Canada*, Oxford, 1929. pp.23-33.; D.C. Scott. *The Makers of Canada*, Lord Elgin (1905), Morange & Co, Toronto, 1909, Kessinger Legacy Reprints, 2010, pp.124, 190-197
- (22) M. Ferreux. ed., *Dictionary of Canadian Biography, X: 1870-1889*. University of Toronto, 1972.; *Lieutenant Governors of Canada West: Governors General of the Province of Canada*, James Bruce, 8<sup>th</sup> Earl of Elgin, John Lambton, Books LLC, La Vergne, 2010
- (23) R.W. Langstone, *Responsible Government in Canada*, 1951. pp.122-145. 第8代エルギンの父第7代エルギン伯 (Thomas Bruce) は1799年末英国駐トルコ大使に任命された。トルコ領ギリシアからバルテノン神殿のレリーフを剝し持ち帰り「エルギン・マーブル」で有名。拙稿「スコットランド第7代エルギン伯爵と大英帝国の時代」（『創価経済学論集』第41巻1・2・3・4合併号 2012年3月）23-35頁参照
- (24) Mrs M. Oliphant, *Memoir of Laurence Oliphant and Alice Oliphant, his wife*, William Blackwood & Sons, 1891. p.24
- (25) 石井寛治『日本の歴史12 開国と維新』（小学館 1989年）83頁、松本健一『日本の近代1 開国・維新 1853-1871』（中央公論社 1998年）187-189頁
- (26) S.G. Checkland, *op. cit.*, pp.61-63.
- (27) フランスとイングランドが100年戦争も時代、イングランド宮廷はヨーロッパ大陸からスコットランドを経由してワインを輸入した。スコットランドのメアリー女王に象徴されるようにスコットランド王室や学識者には長年敵対してきたイングランドに比しフランスは親近感ある国であった。この交流がグランド・ツアーの伝統をうみ、また18世紀後のスコットランド常識哲学学派とフランス百科全書学派の交流を生んだ。Sir J.B. Paul ed, *The Scots Peerages*, Edinburgh, 1906. p.10

- (28) 拙著『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』（藤原書店 2003年）105-110頁
- (29) 拙論「幕末・明治初期のスコットランド人と日本—アバディーン人コネクション」（『創価経済学論集』第12巻2号 53-54頁）
- (30) M.E. Bruce, *Family Records of the Bruces and Cumyns*, Edinburgh, 1870, p.24
- (31) オリファントのような外交・民間で大英帝国を形成していく人たちにスコットランド有識者・地主貴族の子息が多かったことが成功因であった。J. Buchan, *Capital of the Mind*, How Edinburgh Changed the World, John Murray, 2003; S. Lamont, *When Scotland Ruled the World*, The Story of the Golden Age of Genius, Creativity and Exploration, Harper Collins, 2001; Sir J.B. Paul ed, *The Scots Peerages*, Edinburgh, 1906. p.10
- (32) M. Oliphant, *Memoir of Laurence Oliphant And Of Alice Oliphant, And His Wife*, William Blackwood, New edition London, 1892 rep in Kessinger Publishings, 2010.
- (33) N. Canny ed., *The Origins of Empire* (The Oxford History of the British Empire 2001. pp.406, 470
- (34) ハリスについては W.R. Nicoll, *Harris, Thomas Lake*, 1911. の他, C. Hugh. *Encyclopedia Britannica* (Eleventh ed.). Cambridge University Press が詳しい。
- (35) 犬塚孝明「密航留学生たちの明治維新一井上馨と幕末藩士」NHK2001年 136-142頁。
- (36) ハリスと長沢との関係は門田明「カリフォルニアの土魂—薩摩留學生長沢鼎小伝」本邦書籍, 1983年に詳しい。
- (37) 中井の自叙伝の中井 弘「漫遊記程」（1-3巻 明治11年）があるが、渡辺 実「近代日本海外留学生史」講談社 1977年が参考になる。
- (38) D. Defoe, *The Review*, Vol. 3 No. 46, April 1706; Vol. 8, No. 145, March 1712. 当時のスコットランド人科学者の優秀性については S.G. Clement & R.H.S. Robertson, *Scotland's Scientific Heritage*, Oliver & Boyd, Edinburgh 1961. p.162
- (39) オリファントには多数の自著の他 Philip Henderson, *The Life of Laurence Oliphant*, Robert Hale Ltd, London, 1956. が参考になる。彼の父はセイロンの紅茶を英国社会に導入したことで有名。
- (40) 拙著『国際日本を拓いた人々』（前掲書）4-7頁。
- (41) 横山俊夫「ヴィクトリア朝イギリスにおける日本像の形成についての覚書—2」（『京都大学人文科学』50号, 1981年）がある。
- (42) 妻アリスは英国ノーフォーク出身の26歳の女性、その出会いは A. Taylor, *Op. cit.*, pp.168-186.
- (43) 彼がハリスに傾注した経過を、両親のスコットランド監督教会派の信仰を引き継いだ彼に、スウェーデンのボージアン提唱の神秘主義・社会主義的ユートピアを説くハリスは「神のような存在」に覚えた。アン・テイラーの著の書評, P. Quennell, Victorian who found a guru, in *Times*, 17<sup>th</sup> July, 1952 にも書かれている。
- (44) ハリスの信仰に疑問を持ち始めた彼にはユダヤ人のシオニズムは新たな感動と信仰心を鼓吹するものであった。A. Taylor, *Op cit*, pp.191-194. N. Sokolov, *A History of Zionism*, Longman, 1919
- (45) その言葉「私たちの希望」を掲げてジーザス・キリスト教と呼ばれるグループがあり、我が国にも存在する *Scientific Religion, on the bigger Possibilities of Life*, William Blackwood & Sons, Edinburgh and London, 1888
- (46) ダーウィンはイングランドのユニテリアンの家に生まれ、エディンバラ大学からケンブリッジ大学に学んだ。卒業後1836年までビークル号で世界を航海した。彼はライエル『地質学原理』やマルサス『人口論』から「自然淘汰の原理」を着想したといわれる。エディンバラの植物園で長年研究したことが実った形となる。拙著『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』（藤原書店 2003年）131-190頁。
- (47) *Times*, 17<sup>th</sup> July, 1952 E. Gibbon, *Autobiography*, Everyman Book, London, 1927. p.50; G.M. Trevelyan ed., *The English Social History*, London, 1946. p.276.

なお本研究は科研費基礎研究C（平成22-24年）の「第8代エルギン伯爵日英条約とスコットランド人の日本でのディアスポラ研究」による成果の一部である。